

琵琶湖疎水

琵琶湖疎水は、大津の琵琶湖から京都の複数の河川へと流れています。この水路は、かつての首都に新鮮な飲料水と水力発電を供給しており、2つの都市を結ぶ遊覧船の運行ルートともなっています。

1885年に20kmの主水路の建設が始まり、5年後に完成しました。このプロジェクトは、土木技師の田辺朔郎（1861-1944年）が先頭に立って行われ、当時の近代工学の偉業とされていました。また田辺は、この水路を流れる水を利用した、日本初の水力発電所を京都に建設しました。琵琶湖疎水は、飲料水や電力の供給源であるだけでなく、京都-大津間で人や物を移動する際の最速手段でもありました。

主水路は、琵琶湖の南西部から始まり、三井寺を過ぎて最初の（そして最も長い）トンネルを通り、京都の山科地区に出ます。そこからさらに3本のトンネルを抜けて、南禅寺の近くを通りますが、そこではレンガ造りの水道橋が今でも水を運んでいます。この水路は、御所近くの鴨川に合流し、やがて伏見の堀川に合流します。大津と京都には標高差があり、南禅寺付近の水路沿いの区間は特に勾配があります。その地域の斜面を船が上下に移動するために作られたのが、線路付きの傾斜機「蹴上インクライン」です。

琵琶湖疎水は大成功を収め、1912年には完全に地下化された第2の水路が加わりました。この水路は、蹴上インクラインの下で第1疎水と合流します。しかし、鉄道や道路交通が瞬く間に水路の利便性を越え、1951年にはボートの運行も停止してしまいました。蹴上インクラインは遊歩道となり、水路のルートに並ぶ桜やカエデの木は船上からは楽しめなくなりました。一時期は船の通行が止まっていましたが、水路には水が流れ続け、発電や真水の供給に利用され続けてきました。2015年、この水路を船が再び航行するようになりました。大津から京都まではおよそ1時間、京都から大津まではその半分ほどの時間で移動できます。